

ともにつくるともに楽しむ教育旅行のために ユニバーサルデザインの視点から

国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）業務課



はじめに

大阪府堺市にある国際障害者交流センター（愛称ビッグ・アイ／以下、当センター）は、「国連・障害者の十年（1983～1992年）」を記念して、2001年に厚生労働省（当時は厚生省）が、障がい者の「完全参加と平等」の実現を図るシンボリックな施設として設置した。

多目的ホールと研修室、宿泊室とレストラン、障がい者の国際交流と文化芸術活動等を扱う制作部門によって構成された複合施設である当センターは、設計段階から障がい当事者からの意見を取り入れ、徹底的に段差を減らしたつくりを実現しており、開設から20年以上の時を経て見学者のたえることのない完全バリアフリーのモデル施設として運営を続けている。



国際障害者交流センター外観

支援学校等への 教育旅行アンケート調査

2016年施行の障害者差別解消法では「合理的配慮」がうたわれている。これは過度な負担になり過ぎない範囲で社会的障壁を取り除くために必要な便宜の提供義務のことを指す。

当センターでは移動やコミュニケーションにおける困難さに直面する人々のニーズに配慮、誰もが旅を楽しむことのできる社会環境促進と、全国の支援学校等の生の声を旅行業界に届ける意図から、2017年にアンケート調査を実施し、「ともにつくるともに楽しむ宿泊行事のために」という冊子にまとめた（アンケート依頼数・1075校、回答数399校）。

本報告のうち、学校側の「宿泊施設を決める要因」に着目してみると、「（職員の）障がい理解の教育ができていない」、「アレルギー対応」、「刻み食・ペースト食の教育ができていない」、「完全バリアフリー」といった回答が目立つ。一方「旅行会社に見学すること」は、「障がいおよび障がい者に対する理解があり、必

要な配慮や対応をしてほしい」、「親切丁寧・迅速・臨機応変に対応してほしい」、「打ち合わせや連絡をこまめにしてほしい」、「本校は少人数になるので、それでも快く企画していただけるとうれしい」といった回答が多かった。

ビッグ・アイの教育旅行対応

当センターは社会福祉に関わる事柄の優先順位が高い職場である。スタッフの多くは福祉分野の経験がなく現場に入り、少しずつ「障がいと障がい者の理解」や「社会的包摂」の概念、それに沿った身のこなしを体得していく。ユニバーサルな視点に立てば、人はそれぞれ違って当然であり、寄り添う気持ちを基本に、ホテルマン（ウーマン）に求められるおもてなしの心や矜持をもって、柔軟に対応できるのが理想である。

当センターの宿泊室は、重度障がい者対応室を筆頭に、介護用ベッドや車いすのまま入れるトイレや浴室、移動用天井リフトといったバリアフリー機能が特徴だが、ベッドからの転落リスク回避といった理由等



共用部の多目的トイレ



宿泊室（重度障がい者対応室）

から、和室の利用希望も多い。受け入れ準備としては、各種福祉用具の用意、冷温グッズやタオルの追加、防水シーツの敷き込み等には始まり、酸素吸入器等の医療器具持ち込みに際しては業者との打ち合わせも。学校側が不要と判断したアメニティーや備品については事前に撤去する。

食事対応は、送り出される保護者、引率の教諭、帯同する看護師にとっても、一番に神経を使うところである。それは口腔内のトラブルや、咀嚼や嚥下困難、糖尿病や高血圧、アレルギーといった食事制限、摂食障害等、配慮事項は多岐に渡る。当センターでは、事前の指示や要望を的確に理解できるマネージャー、コンタミネーション（異物やアレルギー物質の混入）の完全排除や特別食対応のできる調理スタッフ、配膳を間違わないシステムの確立等、職員養成に努めてきた。かつては特別食持参の場面も見られたが、現在はほぼいかなる食事にも対応できている。食事は旅の印象や思い出にも関わる繊細なイベントであり、みんなで同じものを食べることは修学旅行の楽しみのひとつ。刻み食やペースト食といった特別食提供時で



刻み食、ペースト食

も、できる限り再成型し、食器や彩りにも気をくばることで、誰も疎外感を感じることない場面づくりを心掛けている。

レクリエーションタイムのご相談もある。呼吸器疾患が無いかの確認を先生にお願いして、なんとか実現する夜空の下のささやかな花火。プログラム協力要請をいただくこととなり、スタッフが試行錯誤して堺・千利休にちなんだお抹茶体験の時間をご提供したことも（後に定番化した）。

チェックイン前の入館式で生徒さん達からいただく素敵なお挨拶。ともに一夜を過ごした体験の後の退館式。「ありがとう」の寄せ書きを頂戴することもあり、旅に携わったひとりの人間として、心の宝物とさせてもらっている。

ともにつくる教育旅行

今後は普通学校においても、社会教育やSDGs推進の一環として、修学旅行訪問先の「ユニバーサルデザイン」や「合理的配慮」

への対応力を評価軸に取り入れていくことが自然な流れになっていくのではないかと。「ユニバーサルデザイン」という言葉からは、どちらかと言うと、ハード面の整備がイメージされがちだが、「合理的配慮」の核心は、ハード面よりもむしろソフト面、つまりサービス提供時における個別対応の幅にあるのではないかと実感している。

近年は小規模教育旅行においても旅行会社を介して実施することがほとんどになったが、個別対応が特に必須となる支援学校等の場合、打ち合わせ段階から、ニーズをいかに聞き取れるか、というソフト面がポイントとなる。旅行会社、観光・体験施設、宿泊施設、交通機関といった各セクターが持ちうる単独のリソースでは、個別のニーズまで拾いきれない実情もあるだろう。それでも、それぞれのセクターや担当者が「合理的配慮」可能な領域で協力しあい、今あるバリアを超えていくことが、教育旅行の「ユニバーサルデザイン」ではあるまいかと考える次第である。

【問い合わせ先】

国際障害者交流センター（ビッグ・アイ）
大阪府堺市南区茶山台1-8-1
TEL: 072-290-0900
FAX: 072-290-0920
URL: <https://www.big-ijp>
e-mail: front@big-ijp